

〔曲名〕 Fauste Nozze

恵まれた結婚

〔曲種〕 Marcia Trionfale

祝典行進曲

〔作曲者〕 Giuseppe Manente op.408

ジュセッペ マネンテ

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

人生の三大大行事に誕生と結婚と葬儀がある。

このうち誕生と葬儀は本人の預り知らぬところであるから結婚こそ唯一の最大行事であろう。

同じ結婚式でもピンからキリまであって国王の華燭の祭典から素寒貧（すかんぴん）の筆者の如き結婚式までである。

私は四十余年前それでも神前で式を挙げた。

勿論祝詞（のりと）だけで八雲琴も鳴らない。

心から祝福してくれる人などありはしない。

医者だった叔父は田舎から参列してくれたけれど、「俺はお茶とお菓子の結婚式は初めてだ。一言相談すればよいものを」

とあとで述懐したそうだ。

従って新婚旅行の味などは知らない。

本曲は1930年1月8日、時のイタリア皇太子（ピエモンテ公）の華燭祭典に際して

当時国家財務省守備隊附軍楽長であったマネンテが献曲した吹奏楽で作品408番の祝典行進曲である。

かのメンデルスゾーンの結婚行進曲のモチーフを縦横に駆使した絢爛たる作品。

ピエモンテ公はかのマルゲリータ皇太后（当時）の嫡孫に当り1945年父王エマヌエレ三世の譲位により即位したが、

問もなく第二次世界大戦の結果イタリア共和国の成立により廃位となりポルトガルに亡命した。

悲運の皇子である。

まことに栄枯盛衰の両極をいったもので歴史の中にはこの例が極めて多い。

我々に身近な日本の歴史の中にも戦国時代以後幾多の例を思い浮かべることが出来る。

国王又は皇子の結婚の如何に華やかで大袈裟なものであるかの例として（所謂ピンの）

十八世紀オーストリアの女帝マリア・テレジアが末娘マリ・アントアネットをフランス皇太子（後のルイ・十六世）に嫁がせた模様を記しておきたい。

1770年4月21日フランス皇太子妃となった14才のマリ・アットアネットは57台の馬車に366頭の馬を連ねた盛大な行列を従えてウィーンを出発した。

供ぞろいは132人にのぼり、侍女、髪結人、仕立職人、小姓、聖職者、外科医、薬剤師、料理人、召使、その他パリーへの長旅で

一日に4度か5度取りかえなければならない馬の世話をする35人の人々であった。

16日を経てライン川の川中にある島でアットアネットはオーストリアの衣装をフランス風の衣服に着かえ、

従者たちはここで別れを告げ、彼等に代ってフランスの婦人や召使たちが側近に仕えることになった。

道々聖職者たちは祈りをささげ教会の鐘は鳴り響き、住民たちは陽気にはしゃいだ。

華麗な行列はフランスへの旅を続けフランス国王と皇太子は廷臣たちを大勢引き連れてパツの北東52マイルのコンピエーニュまで出向き一行を迎えた。

行列は一体となってヴェルサイユへ向けて出発、5月16日ヴェルサイユで公式の結婚式が行われ、その夜新築のオペラ・ハウスで大饗宴会が催された。

ウィーンを出発してから式を挙げるまで実に26日を費している。

このような豪華な結婚はあとも先にも余りきかないが、

この王妃は国の財政を傾けるほどの贅をつくし衣装と宝石に莫大を浪費を重ね、

デザイナーたちは「むなしき喜び」「無言の知らせ」「仮面の欲望」と名付けた衣装を作ったり、髪結いは何時間もかけて王妃の髪型を整え、

びっくりするほどの高さに結い上げ、あごが全身の中心になるほどで、之が宮廷中の流行となり、

貴婦人たちはシャンデリヤに触れないように注意深く歩いたという。

結局は革命に逢い、断頭台に登ることになるが、この結婚は幸福を齎（もたら）したのかどうか俄かに断定することは出来ない。

オーストリアの女帝マリア・テレジアがアントアネットに与えた手紙の一節に「この世における唯一の

真の幸福は、

「しあわせな結婚から生まれる」とあるのは古今東西貧富を問わず、筆者も同感で、豪華羨むに足りずという感慨を深くする。

曲の解説ではなくなって了つたが、春秋に富む諸士も結婚については心せられよ。

1971年2月7日発行

イタリアマンドリン百曲選第10集より